

上方落語協会
寄席三味線奏者

やまざわ よしえ

山澤 由江さん



プロフィール

大阪市生まれ。中学の頃からの落語ファンで、高校、大学では落語研究会に所属。大学卒業後、薬剤師として病院や医療器具メーカーに勤務。この間、四代目林家染丸師から趣味として寄席三味線を習ったのをきっかけに上方落語協会の三味線奏者の仲間入り。昨年までは一時期を除き、薬剤師との二足のわらじで頑張る。他方、上方の噺家とその家族らで結成した阿波踊りの「はなしか連」メンバーとしても活躍中。夫は上方落語家の笑福亭仁勇(にゆう)さん。



昨年8月20日に行われた「オーク弁天寄席納涼スペシャル阿波踊り」の様子(写真提供:弁天町市民学習センター)

薬剤師から寄席三味線に転進 阿波踊りを生きがいに

寄席で、笛や太鼓、三味線などで演奏されるのが「寄席囃子」。開演前の演奏を「一番太鼓」と言い、終演後が「打ち出し太鼓」。落語家が登場する際の「出囃子」や、退場する時の「受け囃子」がある。ほかに三味線や太鼓を効果音として使う噺があり、この場合の曲は「はめもの」と呼ばれ、主に賑やかな場面などで演奏される。

上方落語の場合、出囃子の曲目は若手落語家の場合は「石段」という曲を使っているが、ベテランになれば自分の好きな曲を選ぶことができ、この曲がいわばテーマソングの役割を果たすのである。

この寄席囃子の演奏者を、親しみを込めて「お囃子さん」と呼んでいるが、三味線は寄席三味線奏者が担当し、笛や太鼓は主に若手の落語家が演奏している。

今回登場する山澤由江さんは、上方落語協会に所属し活躍する寄席三味線奏者の一人である。

趣味ではじめた三味線が...

山澤さんと寄席三味線との出会いは、

市内の病院に薬剤師として勤めていた1986年にさかのぼる。

「中学生のころから、深夜ラジオでよく落語を聞いていたんです」。高校、大学を通じて落語研究会に在籍し、落語家への夢を育てていた。だが、「両親を早く亡くして祖父母に育てられたのですが、『学業を生かして自立を』という祖父母のアドバイスを無視できず」薬剤師として社会人のスタートを切ることになる。

もっとも、「落語ファンとしての体質は変わりようがなかった(笑)」ようで、5年後、カルチャーセンターで四代目林家染丸師が寄席三味線を教えていることを知り受講生に。

「最初は趣味で始めたのですが、出囃子のおもしろさにひかれ、またプロの絶対数が不足していることを知って...」、2年後、染丸師に弟子入りする。「落語家が駄目でも、何か落語のそばで落語に関連のあるものが出来れば」との強い思いからである。

後継者不足もあり、まもなく寄席囃子の仕事が舞い込んでくる。だが当時は管理薬剤師として医療用具メーカーに

勤めており、「仕事が終ると同時に会社を飛び出して寄席に駆けつけていました」とか。薬剤師と寄席三味線の二足のわらじは、一時期を除き昨年まで続いていたのである。

阿波踊りが活力の源

現在は寄席三味線に専念し、地域の落語会をはじめ、中・高校生対象の古典芸能鑑賞会などでも活躍する山澤さんの、「生きがいであり活力の源」が、阿波踊りだ。

大阪と徳島で阿波踊りを続けている笑福亭学光さんらに誘われ、91年から徳島に同行。噺家とその家族で結成された「はなしか連」には、結成当初から家族ぐるみで参加。また、弁天町市民学習センターの「オーク弁天寄席」恒例の「納涼スペシャル阿波踊り!」にも参加し、パワフルな三味線と踊りを披露している。

「阿波踊りの魅力は、なんといっても何もかも忘れて熱中できること。お客さんに見られる快感もありますね」と山澤さん。今年もハッピー、キマタ姿で「オーク弁天寄席(8月20日(日))」に登場する。(文・脇本勤/表紙写真 高島悠介)